

紙づて

マキアヴェッリは父と仲がよかつた。冗談を言い合う間柄で、法律家である父の蔵書で古典古代の書物について学んだ。役人としてフィレンツェ政庁に勤める以前の様子は、父の覚書から断片的に伝えられている。彼がフィレンツェ共和国第二書記局長に任命されたのは、二十九歳のことである。

その二年前に母を亡くして、三十一歳で父を失い、沈んだ心のまま任務に赴いたフランスで姉の訃報を受け取った。妻をめぐったのは、その翌年である。

マキアヴェッリは出張先から妻や息子に宛てて頻繁に手紙を書き送ったようだが、残っているのは息子宛

マキアヴェッリの家族

武田 好

ての一通のみである（『マキアヴェッリ全集第六巻』より）。

その手紙には子供たち六人全員の名前が登場する。期待をかける三男には、文学と音楽をしっかりと勉強するよう、よく行い、よく学ぶようにと書き記す。そして、帰郷できる日を待ちわびていると母さんに伝えてくれと頼む。素行のよくない長男には善行をと忠告する。

商売のため東方に住むおいに宛てた手紙では、妻への土産に毛織物と縫い針を頼んだり、仕事が順調ならば、見目よろしく、持参金たっぷり生まれのよい女性と所帯を持つようにと勧めたりする。亡くなった姉の息子の身を案じ、相談事にも乗ってやる優しい叔父マキアヴェッリ。自分の娘にはその亡くなった姉の名を付けた。（静岡文化芸術大教授）

2020.3.28

2020.3.28

中日新聞（夕刊）P.1